

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

大学でのリフォーム卒論

大学の先生から卒業論文の意見を求められる事がある。先日も学会の会場校での懇親会で生徒を紹介されたのだが、その生徒はリフォームをテーマに卒論を書いているという。驚くことに参考文献として私の著書を三冊もあげていた。

中古マンションや減築などの著書は一般ユーザーを読書対象として出版したもので、文献として扱われるとは思ってもよらなかったのだ、びっくりした。考えてみるとリフォームの世界が建築の中でその意義と存在が認知されてまだ日が浅く、学問として成立しているとは思えないため、参考文献も少ないのだろうか。

三十数年前にリフォーム設計を始めた時には、どれだけ多くの仲間から「何でリフォームなんて……」と言われたことを思い出し、感慨深い気持ちになった。さらにはリフォームが学問として研究対象となりえるなどとは思ってもいなかったし、その頃の建築系学生が、リフォームを正面から捉えていたとはとても思えない。月日が経ち「先見性がありましたね」と意見が

変わったのだが、その間に私は「リフォーム設計は大事で、なおかつ難しいのだ」と言い続けていたと思う。

その後、先生から学生の「マンションリフォームにおける間取りの変化」と題した論文が送られ、講評を求められた。マンションという限られた空間の中で、どう間取りを作り変えていくのかにも、生活スタイルの時代の流れのなかで変化してきている。論文はリフォーム前後をLDK部分に特化してまとめていたが、読みながらリフォーム特有の生活スタイルの違う個性の高い個々を統計的に扱うのは、本当に難しいと改めて感じた。

子供の姿を見ていたい親のオープンキッチン化事例を見るたびに、仕事と家事と子育てを抱え、子供との共有時間を大切にする暮らしへの設計支援のようにも思える。あるいは夫婦の会話が弾むためのオープン化事例は、リタイア後夫婦の絆の復活あるいは再確認の場づくりかもしれないとも。リフォームの傾向を数値化やグラフ化していくことは、設計根拠の裏付とし

ての意味は大きいのだが、百人百様と言われる要望に応えきるものではないのではないだろうか。

夫婦の絆と言えば、雑誌の特集タイトル「知らなきゃ損する夫婦の法律相談」（『週刊ダイヤモンド』昨年（二月・四日号））に反応した方が多かった。様々なトラブルについて夫婦で力を合わせて乗り切るノウハウをまとめていたが、人間関係だけではなく家問題も本当はいろいろとトラブルものだ。相続という大きな問題もあれば、冬に壊れた給湯器の修理期間の風呂問題など大小はあるものの、それを乗り切るには夫婦で役割分担をはじめに話し合うことが大事だろう。

その雑誌に「変貌する日本の夫婦」も取り上げていた。時代とともに家族といえども変化する人間関係と家との関係性をどこまで紐解けるかが、リフォーム設計者には求められている。学会でもリフォーム論文の発表がずいぶん多くなってきた。今後も益々リフォームに関わる課題は尽きないだろう。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。